

活動成果報告書

平成25年度（第17回）「チヨダ地域保健推進賞」

活動テーマ

DOTSにおける服薬支援のシステム化 ～服薬手帳への随伴性マネジメントの導入～

応募グループ名称及び氏名（グループの場合は代表者名）

群馬県東部県民局桐生保健福祉事務所

代表者：宮崎 香織

勤務先：群馬県東部県民局桐生保健福祉事務所

所 属：保健係

所在地：〒376-0011

群馬県桐生市相生町2丁目531

T E L：0277-53-4131

F A X：0277-52-1572

E-Mail：m-kaori@pref.gunma.lg.jp



◇活動方針

群馬県における平成23年の結核罹患率は、11.2となっており、全国罹患率の17.7と比べると低率になっている。また、桐生保健福祉事務所管内は、12.2となっており、県平均から見るとやや高い状況にある。管内の結核登録患者数は表1のとおり、ここ数年減少傾向にない。更に、潜在性結核感染症患者の登録が微増となっている。年末登録患者数は、多少の増減はあるが、過去5年から見ると減少傾向となっており、結核の根絶にはさらなる対策が必要と考えている。

表1 結核登録患者数 (人)

	H20	H21	H22	H23	H24
新規登録患者	24	20	26	21	27
潜在性結核 感染症患者	0	1	0	0	6
年末登録患者	59	50	34	39	48

結核中まん延国からの脱却は、各地域でのDOTS (Directly Observed Therapy Short-course) の取組が重要な鍵と考えており、当事務所でも表2のとおり、潜在性結核感染症の患者を含め、DOTS訪問による患者支援を行ってきた。平成24年度は、就労している患者が多かったため訪問数は減少したが、代わりに来所面接での確認・指導でDOTSを実施した。

表2 DOTS訪問延件数 (回)

H20	H21	H22	H23	H24
226	226	138	125	92

活動成果報告書

通常、結核患者は半年から一年（またはそれ以上）の長期服薬を余儀なくされる。多くの患者は、服薬の重要性を入院中に教育され、更に保健所保健師による服薬指導により、治療終了まで服薬が継続できる。しかし、長期の服薬について理解をせず、薬を飲む意味を見いだすことがなく、退院後服薬の自己中断をしてしまうことがある。

そこで、自己中断を少しでも減らすため、当事務所では DOTS に工夫を凝らし、患者支援の充実を図ることを目標とした。

◇活動内容

群馬県の DOTS 対策では、平成 18 年から服薬手帳を用いて支援を行っている。一口に結核患者と言っても、国籍、性別、年齢、職業、収入や家庭状況など、様々な家庭環境であることが実情である。

そこで、当事務所では以前から活用していた手帳の様式、デザインを改良し、サイズも 2 種類（A4 と A5）とした（図 1）。高齢者用としての A4 サイズは文字も大きくし、その他はこれまでと同様持ち運びに便利な A5 サイズとした。

手帳の機能は主に服薬カレンダーであり、飲めたら患者本人もしくは家族、施設利用者等の場合は支援者が印をする（体調変化があればそれも記入）という形式を取っている。DOTS 訪問・面接時にそのカレンダーと薬の空き袋を保健師が確認し、服薬の継続を治療終了まで支援していく。

この服薬カレンダーに対しては以前から患者より「面白味がない」「見栄えがしない」「達成感がない」等意見が出ており、中には途中で飽きて服薬手帳の使用をやめ、服薬確認ができない場合もあった。そこで、服薬手帳に随伴性マネジメント（何かができたら報酬を与える方法、依存症の療法として有名）の導入を試みた。これまでは DOTS 訪問・面接時、服薬確認後に日付と保健師の印鑑を残していたが、治療に関わる看護師や薬剤師の意見も踏まえ、新たな試みとして当事務所で作成した「ぐんまちゃん」シール（図 2）を報酬として用意した。

DOTS 訪問・面接時、服薬カレンダーと空き袋での服薬確認後、報酬として「ぐんまちゃん」シールを貼付し（図 3）、平成 24 年度より試験的に活用し、患者の意見を聴取した。結果、以下のような意見が得られた。

- ・「以前（日付と一言だけ）に比べ確認の後にシールを貼ってもらえると嬉しい」
- ・「（シールを）貼ってもらえるとがんばって飲めたと実感できる。また、がんばりたい」
- ・「そろそろ（シールを）貼りに来てくれる頃だと、待っている」
- ・「ぐんまのキャラクターのぐんまちゃん柄なので良い」
- ・「シールに種類があるともっと良い。そうすれば楽しみ」

（図 1. 改良後の服薬手帳）



（図 2. 作成したシール）



（図 3. 確認欄）

	主治医	担当看護師	薬剤師	保健所
確認欄				

活動成果報告書

◇今後の計画

随伴性マネジメントは一見子どもだましのように見える方法であるが、依存症治療でその効果を発揮しており、最近では禁煙法での研究も進められている。今回の調査で患者から得られた意見を見ると、随伴性マネジメントがDOTSにも応用できる可能性を認めたと考えられる。

今回は質的なデータのみでの収集で解析にまでは至らなかったため、今後は研究事業として確立し、本格的な聞き取り調査やアンケートによる調査を行い、質的、量的なデータの収集により、効果の立証をしていきたい。現在は桐生地域だけの限局された試みであるが、研究事業として確立することで県全域にフィールドを広げて実践することも視野に入れている。

また、今回“報酬”のシールには、群馬県のご当地キャラクターである「ぐんまちゃん」を用いたが、キャラクターの知名度から、老若男女誰に提供しても反応が良好であった。更に効果を得るためには、患者の意見を踏まえ、月ごとに変わるシールや、本人の希望によって選べるシール、服薬確認者毎（医師、看護師、保健師、薬剤師等）に種類の違うシール、とバリエーションを増やすことも検討している。また、シールだけでなくスタンプなど、各患者に応じた報酬を用意することや、更には服薬手帳自体をゲーム形式で使用できるように作り、患者が楽しみながら治療を受けられるような方法も試みたい。

近年、医療の世界では旧態然とした形式通りの医療ではなく、患者一人一人に合わせた医療が注目されてきている。保健師の活動もその例には漏れず、患者に対して通り一遍の保健指導を行うのではなく、個々に異なるオーダーメイドの関わりを求められる時代になってきていると考えられる。

薬剤業界では昨今“コンプライアンス（医療者の指示に患者が従う）からアドヒアランス（患者が治療方針を理解して積極的に治療へ参加する）へ”が浸透してきている。結核の服薬は特に種類も多く期間も長きに渡るため、いかにアドヒアランスを良好にするかが重要なポイントとなる。アドヒアランス向上には患者を含めた他職種との協働が大前提であるが、そこに追加して支援をオーダーメイド化することが必要だと思われる。またそうすることにより、治療を受けている患者のみならず、関係者も一緒になって楽しみながら服薬終了を目指せるようにすることが、治療完遂率を更に向上させる近道であると考えている。

チヨダ地域保健推進賞受賞後は、地元新聞社に服薬手帳を用いた治療支援として取り上げてもらい、結核という病気の普及啓発になった。

また、現在は服薬手帳を全面的に見直しているところであり、さらに使いやすいものを目指して作り上げたいと思っている。患者には手帳に関するアンケート調査も計画しており、その結果については学会等への発表も予定している。結核治療において、全ての人の治療終了のための支援を多くの人と共有したいと考えている。

以上